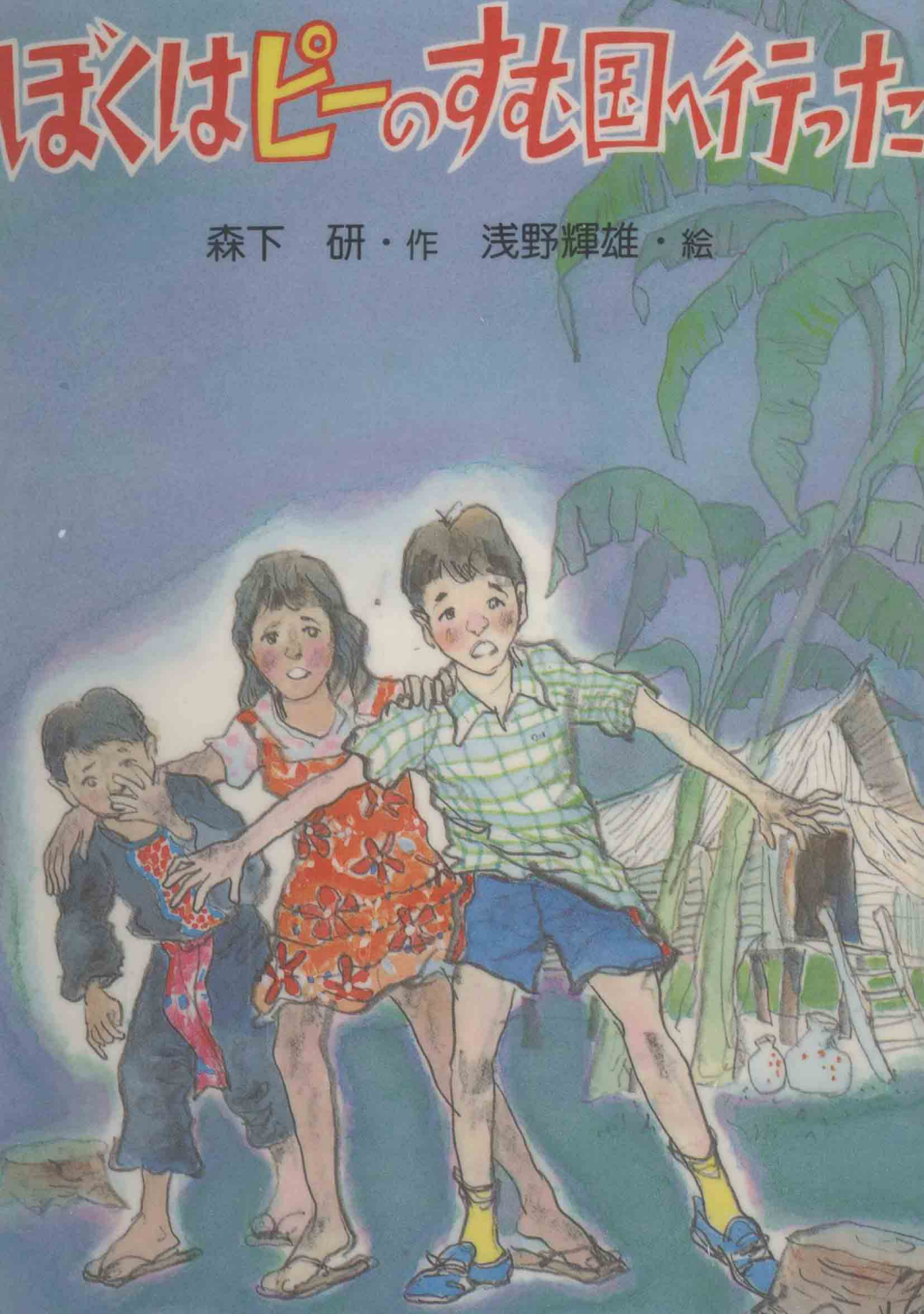
ぼくはピーのすむ国へ行った

森下　研・作　浅野輝雄・絵



ぼくはピーのすむ国へ行った

森下　研
ぼくはピーのすむ国へ行った
ＰＨＰ研究所　1988
〈188〉P　22cm　(ＰＨＰ創作シリーズ)
ＮＤＣ916

1988年３月11日　　第１版第１刷発行

著者　森下　研
画家　浅野輝雄
発行者　江口克彦
発行所　ＰＨＰ研究所
東京事務所　〒102　東京都千代田区三番町３番地10　電話(03)239-6221
京都本部　〒601　京都市南区西九条北ノ内町11　電話(075)681-4431

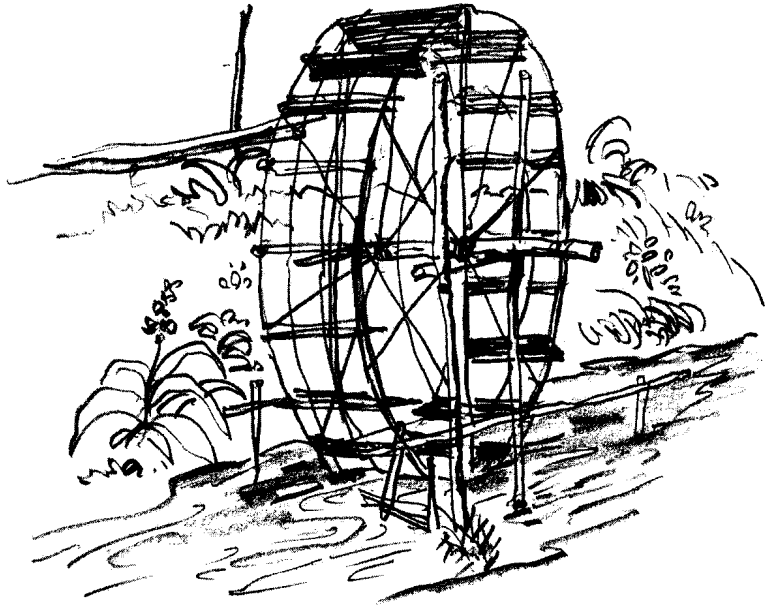
印刷・製本　図書印刷株式会社

© 1988 Ken Morishita & Teruo Asano　Printed in Japan.
乱丁・落丁本はご面倒ですが弊所出版部宛お送り下さい。送料弊所負担にてお取り替えいたします。
ISBN 4-569-28378-0

ぼくはピーのすむ国へ行った

森下　研・作
浅野輝雄・絵

もくじ



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

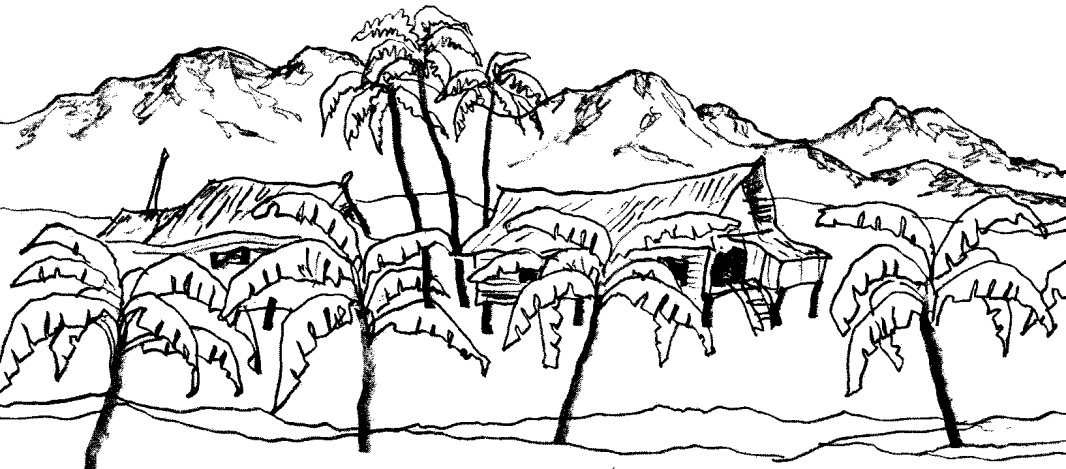
冒険のはじまり

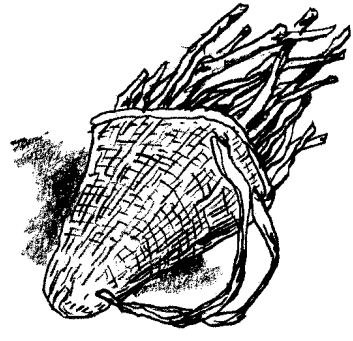
1 かわいた国 8
2 ゾウのはたらく山 23
3 トラのうわさ 34
4 ひみつの花畑へ 48

天国の村

1 とらえられて 63
2 森のボス 74
3 もえるりんの目 89
4 追いつめられて 102

サワンのさいご
1 脱走の道は 117
2 うらぎり 128
3 けむりとほのお 143
4 草原にとどろく銃声 153
何がおこったのか
1 流された血 166
2 とけた謎 177





作家・**森下　研**（もりした・けん）

1930年、門司に生まれる。九州大学卒業。作品には『男たちの海』（児童福祉文化奨励賞受賞、福音館書店）『キャプテン タロ 鯨の海へ』（小峰書店）『ポンコツじてんしゃいっとうしょう』『ゾウをころさないで』（PHP研究所）などがある。現住所 〒182 東京都調布市染地3－1多摩川住宅ロノ8－304

画家・**浅野輝雄**（あさの・てるお）

1942年、愛知県に生まれる。日本大学芸術学部洋画科卒業。主な作品に『アルチコとおおおとこ』（福音館書店）『おかではたらくロバのポチョ』（文化出版局）、さし絵に『ネコだらけの島』（さ・え・ら書房）『ゾウをころさないで』（PHP研究所）などがある。現住所 〒355 埼玉県東松山市松葉町3－15－39

ぼくはピーのすむ国へ行った

冒険のはじまり

1　かわいた国

ル、ルル……ルルル……ル……。

高度をさげるたびにジェット機は、軽いショックに身ぶるいしている。まるで一段ずつ、空気の階段をおりていく感じだ。

ぼくはジャンパーの上からシートベルトをしめなおすと、まどガラスに顔をくっつけた。

ついさっきまでただうす茶色にひろがっていた大地が緑にかわり、しだいにもりあがりながら後ろへ流れていく。ここは東南アジア、インドネシア半島の一角にある国だ。ジェット機は、海に近い首都の空港をとびたって一時間、北の街ワットーへまもなくつこうとするところだった。

ぼくの名は松本アキラ。いまは春休みだから、そう、五・五年生だ。東京の西はずれ、多摩川べりにある団地にかあさんと住んでいる。とうさんはもちろんあるけど、家にはいな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

い。四年前からこの国に、単身赴任中なんだ。ことしの正月に帰ってきて、ぼくたちを春休みによんでくれると約束した。ところが、かあさんはきゅうに、九州にいるおばあさんのところへ行く用事ができてしまった。とうさんのはたらく会社の支店は、首都の街にある。しかしとうさんは、一週間前からワットーへ出張しているので、ぼくがひとり、こっちへ来ることになったわけだ。ただ、無条件でというわけじゃない。残念がったかあさんに、「帰ったら、わたしや学校の友だちに話ができるよう、ちゃんとメモしておくのよ、いろんなことを。」と、ぼくはめんどうくさい約束をさせられている。

チェンさんが、となりの席から顔をつき出した。

「あと、ちょっとでつくね。飛行機、すこしおくれたが、おとうさん、むかえに来ているよ。」

「うん。」

ぼくは何十ぺんめか、腕時計に目をやった。デジタルの数字はさっきから五分だけ進み、三月二十七日午後三時五十三分になっている。時計は、日本との時差で二時間おくらせてあるが、そのぶんを合わせても、成田空港を出発して、まだ十二時間とたっていない。そのあいだぼくは、機内食を二度食べ、すこしねむっただけだけれど、なんだか何十年もすぎたみたいな心ぼそい気分だった。

チェンさんが、また話しかけた。

「いまは乾季だからね。雨、まったくふらない。安心して見物に歩けるよ。」
チェンさんは六十歳ぐらいのおじいさんだ。白いシャツに黒ズボンをはき、日にやけた顔には深いしわがあって、そのおくにやさしい目をしばしばさせている。首都の空港でこのジェット機に乗りかえたとき、はじめて会ったんだが、とてもしんせつだった。
機内サービスでコーヒーが出たら、ことばのわからないぼくのかわりにジュースをたのんでくれる。シートベルトをしめるときとか、このジェット機のトイレの行き方なんかも教えてくれる。
ほんとうは、そんなことは旅行社の人がやってくれなきゃならないはずだ。ぼくは日本から、女性ばかりの観光ツアーの人たちといっしょに来たんだけれど、みんなは前のほうにかたまってわいわい言っている。旅行社の人もだ。ぼくがひとりぽつんとしているのを見て、チェンさんがよってきたんだ。とてもじょうずな日本語で、自分はチェンというものだが横にかけてもいいかね、と言って。
「あれ、何かわかるかね？」
チェンさんが、窓の外を指さした。
つばさの先のほうには山々がつらなっていて、中腹のあちこちから、うす黒いけむりがあがっている。
「わあ、山火事じゃない？」

ぼくが目をまるくすると、チェンさんはにこにこしながら首をふった。
「山を焼いとるんだよ、畑にするために。わたしらの国では乾季と雨季がはっきりしておってね、あとひと月もしたら雨がふる。だからいま、畑のしたくをしてたねをまくのよ。それがすんだら正月のおいわいだ。」
「ふーん。」
ずいぶん原始的なんだ。ぼくは思ったけど、口には出さなかった。なぜって、あんまり失礼だもの。だけどチェンさんには、ぼくの考えたことがわかったみたいだった。
「日本には日本のくらし方がある。わたしらにはわたしらのくらし方があるよ。ただ見物や買い物をするだけじゃなく、ぼうやもこの国のこと、しっかり見てほしいね。」
「ワットーって、どんな街ですか。」
「大むかし、都があった古い街よ。きれいで、とてもすずしい。だから金持とか、ぼうやたち外国の観光客がよろこんで来るのよ。」
「チェンさんも、ワットーに住んでるんですか。」
「ちがうよ、ずっとはなれた山の村だ。」
そう言うとチェンさんは、話をかえた。
「わたしは、むかしから日本の人をたくさん知っとるが、おとうさん、この国で何のしごとしてるのかね。」

「貿易商社。おもに材木を買うんだって。」
「ほう、材木……。」
きゅうに顔をくもらせたチェンさんは、タバコを出してライターをかちりと鳴らした。自分で巻いたみたいな、紙がぶくぶくになったかっこわるいタバコだ。チェンさんは一ぷく大きく吸うと、けむりをゆっくりはき出しながら言った。
「やっぱりチークかね、おとうさんが買うのは？」
「よく知らない。ただ、山おくで切りたおした木を、ゾウとトラックで川まで運んで、いかだにしてから港まで船でひいていって、日本へ運ぶんだって。ほんとなんですか。」
「ほんとうだ、悲しいことだがね。」
悲しいって、どういうこと？　ぼくがききかえそうとしたとき、スチュワーデスが来てチェンさんに何か言った。
チェンさんが、てのひらでかくすようにしてタバコをもみ消す。
もう禁煙のサインが出て、ジェット機は着陸姿勢にはいっていたんだ。窓の下を、ゆるく曲がった大きな川が、白く光りながらとびしざっていく。それが青々とした水田にかわったと思う間に、シートに軽いショックがきて、逆噴射のジェット音がゴーッとおこった。
ジェット機が短く滑走してとまると、前の席から旅行社の人が、やっとぼくを思い出したらしく、ふりかえった。

「おりるとき、みんなからはなれないようにね。」
空港は、野っぱらみたいな感じだった。すこしはなれた建物のところにジープがとまり、警官が三人立っている。
ぼくがボストンバッグを持って通路を出口へ進むと、後ろからいきなりジャンパーのポケットに何かおしこまれた。耳もとで、チェンさんがささやく。
「すまんがぼうや、そのタバコ、あとでどこかへすててくれ。」
なんだかへんな気がしたが、そのままタラップをふんで地面におりたぼくは、くらくらっとなった。まっ青な空でかがやく午後の日がかっと照りつけ、熱い空気はぶよっとからだにねばりつく。息もできないくらいだ。
ツアーの女の人たちは、カーディガンなんかをぬぎながら、きゃあきゃあ言っている。
「いやあ、まるっきり真夏じゃない。」
「ここはさわやかさが売りものなんてガイドブックに書いてあるけど、うそばっかり。」
空港の建物へはいると、とうさんが、シャツにネクタイをしただけのすがたで立っていた。
「あ。」
みぞおちのへんがじんとして、ぼくのからだからあせがどっとふき出した。
「やあ、きたな。」

軽くうなずいたとうさんは、旅行社の人にむかい、
「おせわになりました。」
と頭をさげて、スケジュールをたしかめた。
ツアーの人たちは、ワットーをはじめいくつかの観光地をまわって一週間後、首都の空港から日本へ帰る。ぼくは、そこでおちあう予定だった。
とうさんが話しているあいだ、ぼくは建物のなかを見まわした。チェンさんにさよならを言おうと思って。まわりには同じ便で来たこの国の乗客もまだたくさんのこっているが、チェンさんだけはどこにも見えなかった。
空港の表には、タクシーにまじって、座席をつけた小型オート三輪車が何台も客をよんでいる。
先にたって歩きだしたとうさんが言う。
「あの三輪車はサムローというんだ。街まで乗っていくか。」
「うん、乗る乗る。」
ぼくたちが客席にかけると、サムローはエンジンをけたたましくひびかせてスタートした。がたがた、すごいゆれかただ。
「うわぁ、ふり落とされそう！」
ぼくが席にしがみつくと、とうさんは注意する。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com